

書評

李栄薫編著『反日種族主義との闘争』

櫻井 よしこ (ジャーナリスト)

『反日種族主義との闘争』の執筆陣こそ、真に勇気ある学者・言論人の集団である。戦う人々であると、本書を読んでまず実感した。

彼らの戦いは苛烈である。李栄薫教授以下七名の専門家は強い批判に晒され、すでに名誉棄損で刑事告訴を受けている。李栄薫氏らも、告訴を支援した「共に民主党」の宋永吉議員らを、名誉棄損で刑事告訴した。訴訟と同時進行で筆を振るい続け、上梓したのが本書である。

前著『反日種族主義』への批判に対し、さらなる研究を重ねた本書は、李栄薫氏らの鉄のような堅い意志、事実には拘り続ける専門家としての良心を反映した冷静な指摘に満ちており、殆ど反論を許さない。

本書で李栄薫氏が一貫して強調するのは事実の力である。「事実は勝つ!」と氏は喝破したが、事実こそ最も能弁である。しかし事実の強味は、それを把握した人物、組織がその事実に誠実に向き合い、それに基づいて主張することによってのみ、発揮される。日韓歴史問題で、日本側はたとえば慰安婦の女性たちを政府・軍が強制連行したことを示す資料は存在しないと言いながら、韓国側の激しい反応に屈して主張しなかった。いま、ようやく日本政府も反論を開始したが、これまでの長い沈黙の間に、慰安婦問題は絶望的なまでに歪曲され膨れ上がった。大事なことは、事実を掲げて戦う意志の有無であることを痛感する。

本書は李栄薫教授らが発掘した豊富な事実によって貫かれている。事実を高く掲げて主張する学者としての矜持と勇気が伝わってくる。日韓歴史問題の二大火種としての慰安婦及び徴用工について、本書はこれまでどの書物にもなかった、第一次資料に基づく詳細な事実を紹介している。

慰安婦問題に関する事実は、時間の経過と共に発掘されてきた。たとえばビルマとシンガポールの慰安所の帳場で働いた朴治根の日記の発掘である。新たな資料はそれ以前の研究成果を打ち消す結果につながっており、李栄薫氏は率直にそのことを受け入れ、前説を訂正した。たとえば2007年に上梓した『大韓民国の物語』(文藝春秋)では、李栄薫氏は慰安婦強制連行説を展開する吉見義明氏に多くを学んだとした上で、女性たちは日本軍に強制的に連れていかれたのではなく、女衞、女衞に娘を売った家族らの役割が非常に大きかったこと、また女性たちの中には大金を手にした者もいたと認めながらも、責任は日本政府と日本軍にあると主張した。女性たちの連行に直接関わっていなかったとしても、「行動の自由を奪い性奴隷」としたことは「日本軍の戦争犯罪」だ、と厳しく論難した。

当時私は、李栄薫氏の研究のすばらしさを十分に評価しながらも、慰安婦問題での対日論難の厳しさに、ある種の、日韓間の越えられない壁を感じていた。しかし、氏は今回、

本書でこう書いた。

「その後の十余年間、もろもろの研究書を読み、新しい史料を発掘した結果、私には、日本軍慰安婦制は日本と朝鮮の公娼制が軍隊内で再現されたものであると分かりました。そのため私は、“日本軍の戦争犯罪”だとか、慰安婦は“性奴隷”だったとかの主張に、もう同調しません」

新たな知見が確立されれば、研究を次の段階に進めるのは学者が踏む自然なステップであろう。学問、研究とはそういうものだ。しかし、慰安婦問題がどれほど韓国人に烈しい感情を掻き立てるかを思えば、李栄薫氏の挑戦は「学者の良心ですから」で済むような生易しいものではない。文字どおり、全人生を賭けた戦いとなっている。前述したように、すでに刑事告発はなされた。司法判断によっては、収監や財産接収もあり得る。金泳三政権以来の反日韓国社会では、そのような事例は珍しくない。李栄薫氏らの戦いは、身に迫る生々しい危険をはらんでいるのだ。

氏は、韓国と日本の歴史家たちの傲慢で無知な姿勢が、この三〇年間益々深刻になっていること、その延長線上で教育現場で幼い子供たちの心に反日感情が植えつけられ、将来の日韓関係を深刻な形で棄損する危険が増幅されていることを指摘する。国民のために、歪曲された歴史観を拒否し、事実に基づいて考える能力を育てようという氏らの思いこそ、学者の良心の最も純粋な発露である。祖国の自由民主主義体制が解体されるという強い危機感が、伝わってくる。

李栄薫教授が韓国人に突きつけたのは、まず、自身の姿を見詰めよ、責任は自分達にあるという冷厳な事実だ。そのために氏は、朝鮮社会が女性をどのように扱ってきたかを想起させるべく、日本敗戦後の韓国社会における慰安婦の状況について指摘した。「解放後の我々の中の慰安婦」として詳述したその内容は、日本を非難してきた人々にとっては見たくない、不都合な真実であろう。日本が去った後の韓国では、韓国軍、米軍、さらに民間相手の慰安婦の総数は、日本時代の一〇倍以上に膨張した。慰安婦の置かれた境遇は、あらゆる面において日本時代よりはるかに劣悪だった。

こうした事実を明確な統計及び具体事例に基づいて論述したうえで、氏はなぜこのような悲劇を韓国社会は許容してきたのか、と問う。それを理解するには、朝鮮王朝時代にまで遡って朝鮮社会を見詰めなければならない、と戒める。

「弱小女性に対する性支配の全史をそれほどロングスパンで連続的に叙述した研究成果を、これまで私以外に発言した人はいません」と李栄薫氏は書いた。韓国人として、そのような全史を書くのは本意ではないだろう。しかし、この労作を、対日批判の視線を国内に向けさせるためのものと罵倒した研究者がいた。右の浅薄な見方に対して、李栄薫氏は「切ない」と語っている。

己れの帰属する民族の姿、その歴史を形造ってきた価値観に、なぜ、正対しようとしていないのか。事実を受け入れることなしに、学び、成長、成熟はあり得るのかと、恐らく脱力感を伴いながら述べている、この切ないという心情を想いつつ、私は氏の問題提起に深い敬意を払う。

もうひとつの日韓間の深刻な摩擦である徴用工問題では、李宇衍教授と朱益鍾教授の論文が決定打となっている。日本を糾弾する人々は、日本軍と日本企業の非を鳴らすために特定の個別的事件を取り上げ、負のイメージを膨らませ、徴用工への扱いの不法性と

不当性を印象づける。対して李宇衍氏は、まず時代の大きな流れを提示する。一九三九年から終戦まで、お金を稼ぐために日本に渡った朝鮮人は一六五万人を超えた。募集と官斡旋によって動員された人数の二・八倍である。日本では賃金も払ってもらえず奴隷労働をさせられたと、いま訴えている人々の主張が事実であったなら、上記のような現象は決して起こらなかったはずだ。特殊な個別の具体例を切り出し、それを歴史の主軸の物語とすることの間違いを、李宇衍氏は静かに説いている。

一方、朱益鍾教授は日本を訴えた四人の原告について詳述し、彼らがいわゆる徴用工ではないことを明らかにしたうえで、四人の主張を受け入れた韓国大法院の判決を「歴史の汚点」と断じた。

李栄薫、李宇衍、朱益鍾三氏が巧まずして同じように問うたのは、嘘を恥じない朝鮮人の精神世界である。だが嘘を恥じないのは、日本人も同じである。これまでもなされてきた指摘だが、歴史問題を捏造して日韓関係悪化の原因を作ったのは、一部の日本人である。私たちこそ、その日本人の精神世界を問わなければならない。

鄭安基教授の陸軍特別志願兵についての論考には、深く考えさせられる。前著で特別志願兵制度を取り上げた鄭安基氏は、この制度は「朝鮮の青年たちを戦場に追いやり、日本帝国のために戦わせる」ためだった、との批判に晒された。鄭安基氏は詳細、緻密な反論を展開した。

日本政府は当初、朝鮮で特別志願兵四〇〇名を募集したが、それは朝鮮人政治勢力からの粘り強い要求ゆえだった、というのだ。当時、朝鮮人政治勢力は同化主義という植民統治の合法的空間を活用して、「パンではなく権利を」という参政権請願運動を展開し、一九三〇年代前半には、参政権に先立ち「血税義務の履行」という徴兵制の施行も請願した。

他方、参政権と徴兵制の請願を、総督府は「時期尚早だ」として退けた。それでも朝鮮人政治勢力は諦めず、日中戦争勃発を機に、再度、優秀な資質を持つ志願者に限った志願兵制の施行を主張し、植民地権力はこれを妥協的に受け入れた。朝鮮の青年たちは、日本帝国によって戦場に追いやられたのではなく、自ら強く要求し、政治運動を重ねて特別志願兵になった、と鄭安基氏は指摘する。

なぜ、そのような政治運動が生まれたのか。理由は朝鮮社会に深く根づいていた両班・常民(サンノム)の身分差別だという。志願した者の多くは、常民と呼ばれる郷村社会の低層の人々だった。彼らは陸軍特別志願兵になることで、伝統社会の桎梏と束縛から逃れようとしたのであり、統治者としての日本政府が朝鮮の青年を戦場に追いやったのではない、というのである。鄭安基氏の分析は合理的で、水を飲み下すように胃の腑にストンと落ちる。

歴史を遡り、朝鮮社会の悪弊を抉り出した本書は、繰り返し強調する。現在の韓国を「敗亡」させているのは「嘘の風土」だと。李栄薫氏らの激しい韓国批判の目的は、韓国再生を促すことに他ならない。彼らの命懸けの戦いは、本書出版でさらに加速されているのであり、日本の私たちは、このような良心的な韓国の人々と協力し、支え合い、学び合い、共に強固な日韓関係構築に向けて歩み続けなければならない。

(文藝春秋、2020年)